

## セシウム蓄積の異なるイネの話

大森 良弘、田中 伸裕、藤原 徹

(東京大学大学院農学生命科学研究科 応用生命化学専攻)

2011年3月の東日本大震災により発生した東京電力福島第一原子力発電所の事故に伴い、放射性物質が放出され、福島県をはじめとする広範囲に拡散した。私たちは、事故発生後から事故に伴う放射性セシウムや非放射性セシウムが、実際の福島県の水田でイネにどの程度吸収されるのかについて、調査を行ってきた。この調査には、北海道大学、福島県立医科大学、新潟大学、独立行政法人農業生物資源研究所、独立行政法人農業環境技術研究所、筑波大学、滋賀県立大学、神戸大学の研究者や研究室メンバーの多大な協力をいただき進めてきたものであり、当初は100系統以上の様々なイネ品種や変異系統品種についての調査を行い、イネの品種によって蓄積されるセシウム量に差異があることを見いだした。これらの結果の一部は本報告会でも発表し、また去年は論文での発表を行った。セシウムの蓄積量に違いが見られた系統や品種については、複数年の試験を行ってきており、品種間のセシウム蓄積の差異については、共通の傾向が見いだされてきている。また、変異原処理して得られた系統の中にも玄米のセシウム蓄積量が低いものが見いだされている。

震災より3年以上が経過し、セシウムの動向についての知見が集積してきており、放射性セシウムは土壌に固定化されて、在来品種についてもコメにはほとんど移行しないことが明らかにされてきている。また、収穫されたコメの全袋検査が行われることによって、安心の確保への努力が続けられており、全般的に放射性セシウムの農産物への混入の懸念は、低下してきていると思う。その中で、当初想定していたセシウムの蓄積量の低い品種開発の緊急性は少なくなってきたが、この一連の試験で見いだされた変異系統の解析を継続することで、現在まだ不明な点が多いイネのセシウムの蓄積機構の一端を明らかにすることができるのではないかと考えている。